

## 家父長制度のパラダイム

### —「父にあてて」における預言者的詩人<sup>1</sup>—

野呂有子

1

近代の黎明期、十七世紀のイギリスに生を受けた叙事詩人ジョン・ミルトン(1608~74)は、1645年に『折りおりの歌——英詩・ラテン詩集』を出版している。本稿で論考する「父にあてて」(1631~32?)はこの中に収録されている。<sup>2</sup>「父にあてて」は詩人ミルトンが父ジョン・ミルトンに捧げた120行のラテン詩であり、<sup>ダクテュリックヘキサメトロン</sup>長短短格六歩脚(ラテン詩では通称、英雄詩)で書かれている。この詩は父に対する呼びかけと説得という形式を持つ。詩人は父と自分の関係を詩歌の世界における家父長制度の<sup>パラダイム</sup>枠組の中に置き、これを現行の絶対王権の家父長制度に対置させる。そして、この過程においてミルトンは将来の叙事詩人としての自己を確認している。

「父にあてて」に横溢する「詩人の遊び心」については、ケネディーが指摘しているが、<sup>3</sup> 実際、この作品には人を食ったところがある。父の才能(音楽)よりも、むしろ、自分の才能(詩歌)のほうが正統性が高いと、父に向って断言する点、自分と父親を詩神アポロンの正統な系譜に連なる父子として提示し、それによって、ジェームズ一世——チャールズ一世を頂点とする王権の家父長制度を相対化している点、暗に、チャールズ一世の親政を非難している点などである。

「父にあてて」を1631~2年の作品と見るブッシュに従って、<sup>4</sup> 執筆前後の政治的情勢を振り返って見ると、1603年に即位したジェームズ一世は王権神授説を唱え、王権の絶対化を図り、王と国教会の結びつきを強化し、宗教的反対勢力の弱体化を狙った。1625年、息子チャールズ一世が王位

---

<sup>1</sup> 本稿に提示される概念のいくつかは、『東京成徳短期大学紀要』第26号(1993年3月)掲載の、拙稿、“Milton’s *Ad Patrem, De Idea Platonica, and Naturam non pati senium: From Praise to Exhortation*” (共著)、及び、『東京成徳短期大学紀要』第27号(1994年3月)掲載の、拙稿、“Milton’s *Mansus: From Illegitimate to Legitimate*” (共著)ですすでに取り扱ったものであるが、今回は家父長制度のパラダイムという視点から新たに「父にあてて」を見直し、先の二つの論文においては十分に、もしくは、ほとんど扱われなかった主題—現世の王権に対する詩歌の世界の優位性とミルトンの叙事詩人としての自覚、オウィディウスの『変身物語』との関係、『楽園の喪失』・『楽園の回復』との関連—を中心に論じた。「父にあてて」の日本語全訳は拙稿“Milton’s *Ad Patrem, De Idea Platonica, and Naturam non pati senium: From Praise to Exhortation*” に付記した野呂訳を参照されたい。

<sup>2</sup> Merritt Y. Hughes et al., gen. eds. *A Variorum Commentary on The Poems of John Milton*, 3 vols. (London: Routledge & Kegan Paul, 1970-) vol. 1による。「父にあてて」の原詩、及び英語訳は、John Carey and Alastair Fowler, eds., *The Poems of John Milton* (London: Longmans, Green and Co. Ltd., 1998) 148-155.を主に参照した。

<sup>3</sup> William J. Kennedy, “The Audience of *Ad Patrem*,” *Urbane Milton: The Latin Poetry, Milton Studies XIX* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1984) 79-81.

<sup>4</sup> 「父にあてて」の執筆年代は、年代未詳ミルトンのラテン詩の中でも最も重要とされている。この問題に関しては Douglas Bush, *A Variorum Commentary on The Poems of John Milton* vol.1, 232-240.における Bush の概説を参照されたい。

野呂有子「家父長制度のパラダイム—「父にあてて」における預言者的詩人」『17世紀と英国文化』17世紀英文学研究会編、(平成7年)

を継いでからは国王と議会の亀裂は一層深刻なものとなった。1628年、国王は第三議会を招集、戦費調達を目的として増税を図るが、議会側「権利の請願」を可決してこれに対抗する。1629年に国王は議会を解散し、親政を開始する。1632年に、ストラッフォード伯がアイルランド総督に就任、1632年には勢力を拡大してきたウィリアム・ロードがカンタベリー大主教に任命される。関税の強化、罰金、独占権の復活などが続き、チャールズは議会との取決めを骨抜きにし、無視し、反対する者は投獄するという手段に訴えて政策を推進する。<sup>5</sup> 絶対王政の信奉者であるロバート・フィルマー(1588～1653)はチャールズ一世の治世の初期に叙勲されているが、これはフィルマーが『<sup>パトリアーカ</sup>家父長権論』(出版は、死後27年たった1680年)に集約される国王家父長論を精密化したその褒美であったと考えられる。<sup>6</sup> 彼は1648年には『<sup>アナキエ</sup>制限つき君主制という無政府状態——ハントン氏の<sup>ミダストモナキ</sup>混合君主制反駁論』を出版しているが、これも絶対的国王家父長制を提唱したものであり、国王を父に、臣民を子どもに見立てる理論であった。<sup>7</sup>

長老派に親近感を抱いていたと思われる父のもと、長老派のスコットランド人学者トマス・ヤングに師事したミルトンは、王権と監督制度の癒着・絶対化を推進するジェームズ一世、チャールズ一世の動向には批判的であった。

「父にあてて」の「王冠」・「富」・「黄金」のイメージの使われ方には、現世の国王(チャールズ一世)非難の表出が指摘される。ミルトン父子が「故郷のオリンポスの山にもどり」、「黄金の冠」をかぶり、「天の宮居」をぬけて歩きながら、詩歌を歌うと「星ぼし」が唱和して、「天空は極から極まで響きわたる」(31～34行)。詩人と父親は、黙示録的世界とギリシア神話の世界が混淆する、<sup>8</sup> 詩歌の理想郷において、神や王を思わせる父子像によって提示されている。そして、二人を中心に壮大な宇宙の音楽が鳴り響く。<sup>9</sup> この父子像は『楽園の喪失』(1667)の神と御子の像を想起させる部分がある。ミルトン父子は共に「天の宮居[“templum”]をぬけて歩く」が、『楽園の喪失』では御子は、神が「高くに座しませる宮居[“temple”]に」進み、その右の座につく。(第6巻886～891行)(この「座す」、「歩く」という行為の象徴性については後で述べることにする。)また、『楽園の喪失』では天使たちは神と御子の御業を讃えて賛歌を歌うが、「父にあてて」では、ミルトン父子が唱和すると、それに呼応して星ぼしが歌う。神と御子の創造の御業と、ミルトン父子の<sup>ポエト</sup>詩人[創造する人]の詩歌という点が対比的である。

つぎは、「櫛の葉の冠」のオルペウスについて歌われる。「国王」がまだ「豪奢と底なしの食欲」

<sup>5</sup> この間の事情については、主にアイブズ編/越智武臣 監訳『シンポジオン英国革命1600～1660』(ミネルヴァ書房、1974年)、今井宏『クロムウェルとピューリタン革命』(清水書院、1988年)、新井明訳『楽園の喪失』(大修館書店、1978年)巻末年表を参考にした。

<sup>6</sup> 『家父長権論』の執筆年代については、ed. Johan P. Sommerville, Filmer, *Patriarcha and Other Writings* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991) pp. xxxii-xxxiv を参照されたい。Sommerville はシカゴ版『家父長権論』の執筆は1631年以前と考えられうるとしている。「父にあてて」の執筆年代が1631～32年であるとすれば、両者は比較的近い時期に執筆された可能性もある。

<sup>7</sup> Z. S. Fink, *The Classical Republicans* (1945; Northern University Press, 1962) 27.

<sup>8</sup> ヨハネの黙示録第4章4節。

<sup>9</sup> cf. 『楽園の喪失』第7巻254～259行、557～563行、595～598行。

支配されていなかった頃、詩歌は「国王の食卓に精華<sup>はな</sup>を添えた」が、そこでは飲酒も「節度」をわきまえたものであった。(41～49行) ここには「国王——詩歌——節度」というパラダイムと「暴君——詩歌の不在——豪奢・食欲」というパラダイムが対置されている。現在は「国王」が「豪奢と食欲」に浸っているために、詩歌がその食卓から遠ざけられているのである。「黄金の冠」と「樅の葉の冠」は未来の叙事詩人ミルトンの「鳶と月桂樹の冠」(102行)に収束していく。ここには詩歌の世界における詩人ミルトンの威風堂々たる姿が見える。このように「現世の国王」の「黄金の冠」は詩歌の世界から三度、逆照射され、相対化され、批判的とされている。

「父にあてて」の第12行目からミルトンは自分の資産目録を父に提示するが、それはこの「詩」であり、これが「黄金のクリオより委譲された」詩人の「富」の「すべて」である。ここでは「富」も「黄金」も、その現世的な内実が抜き取られ、内面化され精神化されている。詩歌の世界の基準に照らしてみれば、詩歌こそ「富」であり、詩の啓示を与える詩神<sup>ムーサイ</sup>クリオは「富」を生み出す「黄金」そのものである。これに対して、現世の「富」と「黄金」は否定されるべきものとなっている。父親はミルトンに「金儲け」の道や「黄金への渴望」が照り輝くところへ「進めとは命じなかった」(69～71行)のであるから、詩神<sup>ムーサイ</sup>たちを嫌っているはずはないのである。そしてミルトンは「富」と「黄金への渴望」に取り憑かれた「金の亡者」を攻撃し糾弾する。(93～95行)このとき、ミルトンの脳裏には、「金の亡者たち」の筆頭に立ち、豪奢と食欲に駆られ増税にやっきになる現イングランドの「暴君」チャールズ・スチュアートの姿があったはずである。<sup>10</sup>

1649年、議会派により処刑されたチャールズ一世を弁護して、処刑後まもなく大学者の誉れも高いフランスのサルマシウス(1588～1653)は『チャールズ一世弁護論』を出版し、イングランド共和制の政治的指導者たちを「父親殺害者」として再三糾弾する。ミルトンはこれに応酬して『イングランド国民のための〔第一〕弁護論』(1651)を出版、「そもそも国民が国王を創造したのであるから、国民こそが国王の父親である。暴君を成敗するのは神から与えられた国民の権利である」という議論によって国王家父長論を否定するが、<sup>11</sup>この下地は、「父にあてて」執筆の時点においてすでに醸成されていたのである。

詩歌の観点から、地上の王権を相対化するという構想は「シェイクスピア頌詩」(1630)においてすでに顕在化している。これは、ヒロイック・カプレットを用いた16行詩で、第二・二つ折本(1632)の巻頭を飾っている。ミルトンは二つ折本をシェイクスピアの墓に見たて、これが後代に故人の名声を永遠に伝えしめる偉大な墳墓となる、と歌う。ミルトンは、シェイクスピアを<記憶の息子>、<名声の世継ぎ>と呼ぶ。詩全体がシェイクスピアに対する賛辞であると同時に、権力を誇示する

<sup>10</sup> 物質としての黄金と富の獲得は、『楽園の喪失』ではサタンの追及テーマとなる。鈴木繁夫「呪われた渴望」『新井明還暦記念論文集 ミルトンの光芒』(金星堂、1992年1月)20ページを参照。また、サタンはこの世の君であり、『楽園の回復』においては現世の権力を統括し、これを御子キリストに誘惑の具として差し出す。

<sup>11</sup> 詳しくは、拙論『『イングランド国民のための第一弁護論』における自由と隷従』、永岡薫・今関恒夫共編『イギリス革命におけるミルトンとバニヤン』(お茶の水書房、1991年8月)275～332ページ、及び、『『イングランド国民のための第一弁護論』におけるミルトンの英雄観』、『新井明還暦記念論文集 ミルトンの光芒』72～85ページを参照されたい。

王侯に対する痛烈な皮肉になっている。巨大な墳墓に比べれば、二つ折本は余りにも小さいが、その中には、人から人へ、時空を越えて継承される偉大な詩劇作品が収められている。永遠に人の心を捉える力を持つ文学に比べれば、強力な王権も<sup>はかな</sup>儂い。しかし、この時点でのミルトンの自画像についていえば、「アポロンの信託のごとき」シェイクスピアの詩行は、<sup>12</sup> 「遅筆に苦慮」するミルトンを「顔色なからしめるほどに」「澱みなく流れ」る。ミルトンはただ「大理石」のごとく恍惚としてそれを受け入れるのみである。自分をアポロンの正統の嫡出子として位置づけるだけの自覚は少なくとも詩中には明示されない。

1629年、12月執筆の「キリスト降誕の朝に」では地上の王権は「天の至上の主君」の前で<sup>ちぢ</sup>疎みあがっているが、(59行)この年3月にチャールズは議会を解散している。この清浄で静謐な詩の中にもミルトンのチャールズ批判が見出される。1637年11月執筆の「リシダス」においては、チャールズ一世と結託して私腹を肥やす牧師たちが羊を省みず、これを食べる「盲目の口」(119行)として非難されている。リシダスは神格化され「守護神」として蘇生する(184行)が、これも一面では絶対神格化され「国家の守護者」として崇め奉られるチャールズを相対化する機能をもっている。歌い終わった「野人の羊飼」は青いマントをはおり、「新たなる森、あたらしき牧場」をめざして牧歌の世界を後にする。<sup>13</sup> このように、ミルトンの詩には初期の頃から、国王を絶対化しようとする王党派、国教会などの動きに対して、たえずこれを突き崩し相対化しようとする動きがあった。「リシダス」はミルトンのキリスト教的な叙事詩への傾倒を顕著に示す作品である。だが、「リシダス」は「亡き友にたいする真摯の頌詩」であり、その主題は「ミルトン自身の意識」ではない。<sup>14</sup> それに対し、「父にあてて」では、ミルトンは父への深い感謝の気持ちを表明すると同時に、その恩返しとして、自分の詩が「不滅の生命」を獲得し、「父の名が、はるか後世まで範例としてとどまる」ようにと、自分の「子孫」たる詩群に命じるのである。詩歌の才能を自分に与え、詩の道に進むことを許してくれる父に感謝するということは、必然的に詩人としての自己を明確に意識することに繋がらざるを得ない。

## 2

ミルトンの時代の教育課程においてラテン語が必須科目であったことは周知の事実である。勿論、ミルトンが通ったロンドンの聖ポール学院も例外ではなかった。とくにオウィディウスの『変身物語』の重要性については、ハーディングが明らかにしている。<sup>15</sup>

ドゥロシエルは『変身物語』のオルペウスとの関係で「父にあてて」を論じている。ミルトンは詩作を始めたごく初期の頃からしばしばオルペウスについて言及しているが、「父にあてて」におい

<sup>12</sup> 『シェイクスピア頌詩』の訳は宮西光雄『ミルトン英詩全訳集』(金星堂、1983年)上巻113ページを参照した。

<sup>13</sup> 新井明『ミルトンの世界』(研究社、1980年)、78ページ。

<sup>14</sup> 新井、79ページ。

<sup>15</sup> Davis P. Harding, *Milton and the Renaissance Ovid* (Urbana: University of Illinois, 1946) 31.

て初めて「大いなる高みを目指す詩人の規範として」オルペウスを提示しているという。<sup>16</sup>

「父にあてて」は、ユピテル——アポロンを頂点とする家父長制度をパラダイムとして、その中に詩人ジョン・ミルトンとその父親を位置づけている。オルペウスはアポロンの息子であり、詩歌と音楽をつかさどる父神の正統な嫡子である。詩の効用を述べて、父親を説得しようと努める詩人(ミルトン)は、詩歌の力により「川の流れをあやつり、櫛の木ぎを動かし」、「<sup>よみ</sup>黄泉の国の死者たちを奮い立たせ、涙させた」(53~55行)オルペウスを提示する。父親とミルトンの内にはアポロンが、才能の一部ずつを分け与えて入っている。父親と自分はアポロンの「正統の嫡子」であり、オルペウスの系譜に連なる血統であると結論づける。

一方、「父にあてて」には、『変身物語』第2巻1行から440行の「パエトンの挿話」を意識したことば遣いが散見される。これはミルトンとパエトンを対置し、その対照性を浮き彫りにするという効果を上げている。「父にあてて」(97行)に、“Publica... lumina”[公共の光]の語句が見えるが、これは『変身物語』に登場するパエトンが、アポロンへの呼びかけに用いた“lux... publica”に呼応する。<sup>17</sup>これに対しアポロンは「そなたの望むものは安全ではない」(53行)、<sup>18</sup>「わたくしは致死の贈り物を与えることになるのだ」(88行)、「すべてを与えよう。だが、これだけは望まないでほしい」(97~98行)等、説得を試みるがパエトンは聞く耳を持たない。<sup>19</sup>「父にあてて」の「公共の光」の前後の詩行を見ると、行間に『変身物語』のアポロンの口調が<sup>こたま</sup>残響していることがわかる。しかし、ミルトン父子とアポロン——パエトンは似て非なるものである。ミルトン父子はユピテル——アポロンの関係に準えられているし、ミルトンの試作能力は日輪の戦車を凌駕するのであるから。

父が、いや、ユピテルその人が、すべてを——天界を唯一の例外として——与えてくれる  
というのに、これ以上に偉大な贈り物を望むことなどありえません。

若き息子に公共の光——すなわち太陽神の戦車と、昼の手綱と  
栄光の輝きがほとぼしり出る光輪——を与えた<sup>ユピテル</sup>大神でさえも(これらが無害の  
贈り物だったとしても)これほどまでに偉大な贈り物を与えはしなかったのです。

(95~99行、傍点は論者による)

<sup>16</sup> Richard J. DuRochel, *Milton and Ovid* (Ithaca & London: Cornell University Press, 1985) 68.

<sup>17</sup> Ed., Merritt Y. Hughes, *John Milton: Complete Poems and Major Prose* (New York: Macmillan Publishing Company, 1957) 85.

<sup>18</sup> Ovid, *Metamorphosis* 2 vols., trans. Frank Justus Miller, 3rd ed., rev. by G. P. Goold, Loeb Classical Library 42-43, Cambridge, (Massachusetts: Harvard University Press, 1977) から引用。以後、『変身物語』の引用はすべて、この版から引用。日本語訳は野呂。かっこ内の数字は行数を示す。

<sup>19</sup> Kennedy 79.によれば、16世紀に広く流布したオウィディウスの註解書、Georgius Sabinus, *Metamorphoses seu fabulae poeticae*, reprint of 1589 ed. Published J. Wechel, Frankfurt (New York, 1976) 58.では「パエトンの逸話」は、息子たちには父親の注意に耳を傾けるようにという教訓であり、父親たちには安請合いをしないように知恵を働かせよ、という忠告であると説明されている。

「父にあてて」創作の際、ミルトンは『変身物語』のパエトンによるアポロンの説得、父神による息子への説得を念頭においていたはずである。なぜならば靈感への祈念に始まるこの詩は、四重の層からなる父への語りかけと説得、敵に対する糾弾、父への再度の説得を経て、自分の詩を子孫に見たて、それに対して呼びかけ、最後は預言で締めくくるという構造をもっている。「父への説得」というモチーフは、「父にあてて」では大きな比重を占めているのである。『変身物語』ではアポロンは息子の説得に失敗し宇宙に崩壊の危機が訪れるが、「父にあてて」においては詩人は父親の説得に成功し、宇宙秩序は回復される。詩人は詩歌に宿る「神性」を根拠として、父親に詩歌を侮らせず、息子たる自分に詩歌の道を進む許可を与えるよう懇願する。詩歌には悪を封じ込める強い力があるという。父親を経由して天から授けられた詩人の靈魂は、太陽神アポロンの駆る戦車さながらに天球層を飛翔する。

いまもなお、速やかに回転する天球層を天翔ける、火炎のごときわが靈魂は、<sup>あまが</sup>星ぼしの合唱に和して、不滅の旋律を奏で  
えもいわれぬ詩歌を歌うのであります。(35~37行)

ここには天体の運行に完全に調和した理想的な「靈魂」の状態が提示されている。この理想的な状態の背後には、『変身物語』の第2巻のアポロンの言葉——「天の穹窿は目も眩むばかりの速さで、いと高き座にある星ぼしを巡り回っている」、「わたくしは宇宙の迅速な回転に逆行しながら駆って行くのだ」(70~73行)——が反響している。詩人ミルトンの「靈魂=詩魂」は太陽神アポロンを凌駕する境地にある。そして詩人の詩歌は、危険で猛だけしい天球の獣や巨人たちを宥め和らげる。

.....輝く蛇〔座〕は火の息をひそめ、  
荒ぶるオリオンは心和らぎ、<sup>つるぎ</sup>剣を落とし、  
モーリタニアのアトラスは、もはや天をも重荷とは感じないのであります。

20 引用中の“Spiritus”が、誰の靈魂を指すかについては、批評家の間で議論の分かれるところである。この問題に関しては、Douglas Bush, *A Variorum Commentary on The Poems of John Milton* vol. 1., 245-246.で概括的に説明されている。(Bush自身はこれを、「天体の音楽に調和する歌を歌う、ケルビムのことであり、それゆえこの歌は人間には“unutterable”である」としている。)論者は、John Carey, *Review of English Studies* n. s. xv (1964) 180-4.に従って、詩人ミルトンの詩魂を指すものとする。ただし、本論でも示したように、この靈魂は『樂園の喪失』における御子の戦車を予表すると考える論者は、これがエゼキエル書とまったく関係がないとする Careyの主張には同意しない。かりに、これが詩人自身の詩魂を指すものでなかったとしても、やはりここには、後の『樂園の喪失』における御子の御する「生ける靈の戦車」の一つの原型がある、と論者は見る。その、根拠は本稿でも論述するように“Spiritus”と“Spirit”の語の共通性、両者がともに、破壊された世界を回復・復元していること、ともに否定的な人物の御する戦車と対比されることが挙げられる。

(38~40行)

ここでいう「蛇」とは、『変身物語』第2巻でパエトンの戦車が近づき過ぎたために凶暴化した蛇である。(173~174行)「アトラス」も灼熱の天を背負いかねて苦悶した。(296~297行)そして、『変身物語』第8巻において、囚われの名工ダイダロスが飛翔の際に「オリオンの剣のそばを飛ばさないよう」(207~208行)にと息子イカロスに忠告している。

パエトンはアポロンの説得を受入れずに墜落され、イカロスも高く飛び過ぎ、太陽の熱で翼の蠟が溶けて墜落した。17世紀にはイカロスの墜落は節制欠如の寓意とされた。<sup>21</sup> 逆にいえばミルトンは「父にあてて」において自己を節制の人として提示しているということである。そして、節制の欠如したイカロスは詩の深層でチャールズ一世と繋がっている。このように「父にあてて」第38行から40行の背後には父の戒めに逆らって墜落した息子たちの姿がある。それに対し前景化されているのは、父親と共有する詩歌の戦車／翼を操って、天球の動きと調和する詩人の姿である。不肖の息子たちとは対照的な、正統の父権継承者ミルトンの像が浮き彫りにされている。ちなみに『変身物語』第2巻には宇宙の秩序の回復についての記述はない。パエトンが破壊しかけた宇宙は「父にあてて」の主人公たるミルトンにより再生され、以前以上の平和が再構成されたことになる。

じつは詩人の靈魂 [“Spiritus”] による宇宙秩序の再生という行為は、『樂園の喪失』第6巻で御子が御する靈的な戦車と御子の行為のひとつの原型になっている。「みずから靈 [“Spirit”] に生きるがゆえに曳くものを要しない」(752行) 戦車に乗った御子は、まずはじめにサタン軍との激戦で破壊された天界を回復させる。

引き抜かれた山々は、み子の命令によって  
もとの場所にもどり、み声を聞いて山々は  
すなおに従う。天はいつもの<sup>おももち</sup>面持になり、  
山や谷は新しい花を咲かせて<sup>ほほえ</sup>微笑んだ。

(第6巻 781~784行)<sup>22</sup>

御子の戦車 [“Chariot”] は、聖書の「エゼキエル書」第1章、第10章を下敷きにする靈的な、「父なる神 [“Paternal Deity”]」の戦車である。すなわち、御子の戦車は父たる神から委譲されたものである。これは御子が神の正統の世継ぎであり、神の代行者であることを象徴している。<sup>23</sup> そして、

<sup>21</sup> 鈴木、24~25ページ。

<sup>22</sup> 新井明訳『樂園の喪失』。以降、『樂園の喪失』の訳はこの訳書より引用。

<sup>23</sup> Stevie Davies は *Images and Kingship in Paradise Lost* (Columbia: University of Missouri Press, 1983) 179. において、御子の戦車とサタンの戦車の対照性を指摘し、御子の戦車が父たる神から委譲されたものであり、御子が神の代行者であることを象徴していると論じている。Kitty Cohen は “Milton’s God in Council and War,” *Milton Studies* III (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1971) 173-178. においてサタンの戦車とアポロンの戦車の類似性、サタンとパエトンの共通性、パエトンと御子の対照性、御子の戦車が天に平和と秩序をもたらすものであるこ

野呂有子「家父長制度のパラダイム—「父にあてて」における預言者的詩人」『17世紀と英国文化』17世紀英文学研究会編、(平成7年)

天に秩序と和平をもたらす。これとは対照的に、パエトンの戦車はサタンの戦車の原型になっている。

まん中に神のごとくに上げられて  
背教者は、神の<sup>みつひ</sup>威光の偶像として  
陽光さん然たる戦車に座し、炎のケラブらと、  
金色の楯とが、かれを囲んでいた。

(第6巻99～102行、傍点は論者による)

このきらびやかな戦車の叙述は『変身物語』の日輪の戦車の叙述を想起させる。<sup>24</sup> パエトンが御した時にも似て、見かけ倒しで実質がない。神を気取って登場したサタンであるが、アブディエルの一太刀を浴び、ミカエルに深手を負わされ、戦車に運び込まれ、最後には御子の雷電で地獄に墮とされる。以上から、「父にあてて」における詩人ミルトン vs. パエトンという図式は『楽園の喪失』における御子 vs. サタンの図式の一つの原型になっていることが明らかである。

### 3

パエトンが宇宙を荒廃させたのに対し、ミルトンは宇宙の平和を復元した。オルペウスが詩歌の力で地上の木々や流れを和ませたのに対し、ミルトンは宇宙の怪物や巨人を和ませた。そして、宇宙の回復という行為は、アポロンを超越し、『楽園の喪失』の御子に連なる行為であった。このことから、ユピテル——アポロンを頂点とする家父長制度も相対化されていることは明らかである。他にも、たとえば、「父にあてて」において詩人の規範となる「長髪に櫛の葉の冠」のオルペウスは、英雄や天地の創造について、地を這う神がみや、雷電の不在について歌う。(47～48行) ここには直立して天を仰ぐ人間の範例となる、威厳に満ちた神ではなく、四つ足の獣のごとき異神たちの姿がある。ゼウスだけが所有する無敵の武器、雷電もまだ存在していない。

ちなみに、『楽園の喪失』において御子は雷電でサタン軍を天上から追放する。

み子は力半分も出さず、反射のままに  
<sup>いかづち</sup>雷をとどめた。み子は悪魔の群れを滅ぼすのでは  
なく、天から根絶することを狙っていた。

(第6巻853～855行、傍点は論者による)

---

とを指摘している。Davies も Cohen も「父にあてて」への言及はない。

<sup>24</sup> Harding, 89-90. は『変身物語』でパエトンの訪れた太陽神アポロンの宮殿の叙述と、『楽園の喪失』第3巻でサタンが訪れた太陽の叙述(591～598)の近似性を指摘、ミルトンがこの箇所を創作する際、「意識的に」『変身物語』を下敷きにしたと論じている。



ギリシア神話的家父長制度の「筆頭者」たるユピテルの所有する雷電は、ここでは神ではなくその「代行者」御子に託されている。キリスト教的家父長制度における「筆頭者」ではなく、「次席を占める者」に雷電が委譲されているのは、キリスト教的神話の世界がギリシア神話の世界を凌駕する一つの証左である。また、『変身物語』第3巻でユピテルは「反射」の状態でセメレを雷電で撃つが、御子はサタンの一党をなぎ倒している。ユピテルの雷電が致死の武器であるのに反し、御子の雷電は、戦車と同じく、あくまでも秩序回復のための平和の道具なのである。

ギリシア神話の枠組を凌駕する、一層偉大な枠組を再構築しようとする詩人は、自分に課せられた「いっそう偉大な務め」について語る。(78行) 父親の寛大さのおかげで、主要な諸言語を習得し(79~85行)、「知識」偏重に墮すこともなく(90~92行)、おのが道を邁進する詩人は、ついに将来の叙事詩人としての自覚を表明する。

・・・・・・・・・・・・・・・・いまわたくしの占める位置が  
いかに低いものであるにせよ、必ずや、わたくしは  
勝者の徴たる鳶と月桂樹の冠をかぶって座すことになろうぞ  
もはや、わたくしは、烏合の衆に混じって無名のままでいることはなく  
汚らわしい人目を避けて、ひとり、歩を進めることになろうぞ。

(100~104行、傍点は論者による)

「ひとり、歩を進める」詩人(ミルトン)の姿は、『樂園の回復』(1671)における御子キリストの原型になっている。キリストは一人荒野に歩を進め(第1巻189~191行)サタンの誘惑を退け、また一人、ひっそりと母のもとに帰る。(第4巻638~639行)「玉座につく神」の姿が、完成された究極の姿を象徴する一方、「一歩一歩たゆみなく歩く」姿は、キリストを範例として「偉大な務め」に向かって努力するピューリタンの、「あるべき人間」の姿を象徴している。「父にあてて」のミルトンは、凜<sup>りん</sup>として内的な悪を退け「歩を進める」。

去るがよい、なんじら、眠りを知らぬ<妄想>と<不満>よ。  
山羊のごとく流し目で見ると嫉妬のまなざしよ。  
口を開けるな、大蛇のごとき<中傷>よ。忌むべき群よ。  
なんじらにわたくしを傷つける力はない。なんじらの  
支配など受けない。なんじらの吐く毒息の届かぬ高みに引き上げられて  
わたくしは心安らかに歩を進めることになろう。

(105~110行、傍点は論者による)

この若きミルトン像は、散文時代のミルトン像—大学者サルマシウスに「ひとりで立ち向かい」、<sup>25</sup> 「ひとり」クロムウェルに「勸告を与え、イングランド国民の<sup>いさおし</sup>勲を讃え」、<sup>26</sup> 敵の集中砲火を「一身に浴び」ながらそれに耐え、<sup>27</sup> 王政復古前夜に、ひとり自由なる共和国の建設を提言したミルトン像—に連なる。それはまた、サタンの詭弁に惑わされることなく「ただひとり」神のもとに戻ってきたセラフのアブディエル、<sup>28</sup> 人類の罪を一身に背負い、ひとり荒野に歩を進め、サタンを撃退した御子に連なるものである。<sup>29</sup>

退がりおれ。いまや、正体をあらわしたな、  
悪魔、永遠に呪われたるサタンたるもの！

(『楽園の回復』第4巻193～194行)<sup>30</sup>

そして、これらの像に共通するのは「神から預かった言葉」を拠り所として「真実を擁護し」、<sup>31</sup> 「悪を糾弾する」という点である。ゴルゴンのごとき<妄想>と<不満>、山羊の目をもつ<嫉妬>、大蛇のごとき<中傷>は、人間の内面にひそむ悪徳が寓意化されたものである。叙事詩人として立つ決意を表明した詩人は心の暗黒空間からこれらの怪物を糾弾し追放する。オルペウスが<sup>よみ</sup>黄泉の国の死者たちの心を動かしたのに対し、ミルトンは現実の人間の心中に<sup>うごめ</sup>蠢く怪物たちを放逐する。キリストは、人類の心の「内なる楽園」—「神との信頼関係」—を回復するという、この上なく偉大な務めを果たすのであるが、「父にあてて」の詩人は、「神性」を宿す詩歌の力で、人間の内面の悪徳と対峙し、これを追放する。つまり詩歌の力で人類を救済に向かわせることがキリスト教叙事詩人ミルトンに課せられた「いっそう偉大な務め」の内容である。「父にあてて」の主人公たる詩人は、父から委譲された「靈魂の戦車」に乗り、破壊された秩序を回復するという点で『楽園の喪失』の御子の原型となり、「神から託された言葉の力」で「悪徳を追放する」という点で『楽園の回復』の御子キリストの原型となる。一方、「父にあてて」の行間を<sup>さまよ</sup>彷徨うパエトンやイカロス、蛇や暴君、寓意化された悪徳や悪意は、この後、幾多もの修正、変換、統合をへて、『楽園の喪失』・『楽園の回復』のサタン像として生成されることになる。この事についてはいずれ機会を改めて論じたい。

ギリシア神話的家父長制度を越える、一層堅固で強大なパラダイムを再構築しようと模索する詩人は、詩の末尾で、自分の子ども達、「稚拙なき」詩群に呼びかけ、自分を預言者的詩人として提示することで締めくくりとする。

<sup>25</sup> *The Works of John Milton*, vol. 8, gen. ed. Frank A. Patterson, (1933; New York: Columbia University Press, 1960) 15.

<sup>26</sup> *Ibid.* 255.

<sup>27</sup> *The Works of John Milton*, vol. 9, 3-5.

<sup>28</sup> 『楽園の喪失』第5巻875行、898行、901行、第6巻24行。

<sup>29</sup> 「父にあてて」においては、アポロンの「正統なる後継者」がひとつのモチーフであったが、『楽園の回復』では、ダビデの「正統なる後継者」の内容がキリストとサタンの争点のひとつとなっている。(cf. IV, 373, 404.)

<sup>30</sup> 新井明訳『楽園の回復・闘技士サムソン』(大修館書店、1982年)より引用。

<sup>31</sup> 第二コリント書第2章17節。

もしも忘却の暗闇がそなたらを黄泉の影の中に払い落とさなければ  
この賛歌は残り、わが詩歌が寿ぐ父の名ははるか後世にいたるまで  
範例としてとどまることになるであろう。

(118～120行)

「父にあてて」は詩歌中の詩歌、すなわち範例となり、「父にあてて」を創造したミルトンは詩歌の父祖となるという。いかにも人を食った詩行であるが、ともかく詩の末尾においてミルトンを頂点とする新たな家父長制度のパラダイムが生成されたのである。ミルトンが詩歌の世界の筆頭者の座を占めたいま、父は父祖の父祖、父親たちの範例となった。いま、一步ずつ歩を進めて「パルナッソスの山を登り〔＝詩歌の道に精進して〕」頂上に着いたミルトンは、預言者的詩人として未来の自分の子孫たる詩群を俯瞰している。<sup>32</sup>

「父にあてて」を1632年の執筆とすれば、「シェイクスピア頌詩」執筆2年後、「リシダス」執筆5年前にミルトンはユピテル——アポロンを頂点とするギリシア神話の家父長制度を越える、新たな家父長制度を生成したことになる。それは父ジョン・ミルトンを曾祖父、詩人ジョン・ミルトンを父とし、詩歌を子どもたちと見る家父長制度であった。国王家父長制に対し、いわば詩人家父長制を対峙させたのである。王権神授説 (divine rights of kings) に対し、詩人権神授説 (divine rights of poets) を提唱したといってもよい。このパラダイムを構築することによって、ミルトンは、ジェームズ一世——チャールズ一世を頂点とする王権の家父長制度を相対化し、世俗権力に優先する詩歌の世界——新しきアポロン、新しきオルペウスの世界——を提示した。そしてこの時、未来の叙事詩人としての決意を表明する自己の姿が作品中に明示されることになったのである。

<sup>32</sup> 「山を登る」というのは、「快活の人」の水平の歩み、「沈思の人」の垂直の意識に対して、ほぼ中間的(両義的)な動きである。頂上から未来を俯瞰する／語るという行為は、『樂園の喪失』第11巻、12巻のアダムを想起させる。